

## 博士論文要約

題目：「江戸時代歌舞伎衣裳の研究-その成立と展開-」

氏名：白土 亜枝

歌舞伎は江戸時代から続く日本の伝統芸能のひとつである。その中で、歌舞伎衣裳は、役柄を表現するなど、歌舞伎において重要な役割を果たしている。しかし、これまで行われてきた江戸時代の歌舞伎衣裳に関する研究は、概論的な研究、断片的な研究が中心であり、十分に研究がなされているとはいえない。

そこで、本研究では、江戸時代の歌舞伎衣裳について、包括的に明らかにすることを目的とした。研究・考察には、風俗画や浮世絵をはじめとした絵画資料、評判記や芸談をはじめとした文献資料を用いた。

以下、本論文の第1章から第7章までを要約する。

第1章では、先行研究を精査し、研究の余地を明らかにするとともに、研究目的、研究方法、資料とその有効性、時代区分について述べた。

第2章では、慶長8(1603)年から天和3(1683)年までを「草創期歌舞伎」と定義した上で、衣裳について論じた。

17世紀に制作された風俗画や『古今役者物語』を資料に、衣裳について調査した結果、草創期歌舞伎が市井の風俗を写すことから始まり、その主軸を踊りから芝居へと移行していくことに伴い、衣裳も舞台衣裳の役割を獲得し始めたことが明らかになった。

第3章では、貞享元(1684)年から宝永7(1710)年までを「元禄期を中心とした歌舞伎」と定義した上で衣裳について論じた。

元禄期を中心とした歌舞伎において、衣裳は役柄を視覚的に表現する舞台衣裳としての役割を獲得したことが明らかになった。また、役者はより良い衣裳を着用するため、衣裳に工夫を凝らしていた。評判記の記述からは、役者自身が衣裳を考案していた可能性が推察された。一方、観客は役者の着用する衣裳や衣服に高い関心を抱いており、役者の名前のついた帯結びや模様が流行していた。評判記や絵入狂言本の挿絵を見ると、役者の衣裳には一般女性の小袖様式が反映されているものが見られた。

第4章では、正徳元(1711)年から寛延3(1750)年までを「享保期を中心とした歌舞伎」と

定義した上で、衣裳について論じた。

享保期を中心とした歌舞伎は、人形浄瑠璃をはじめとした他の芸能や幕府による政策などの外的要因の影響を強く受ける時期にあたる。このような外的要因の影響は、衣裳においても現れており、他の芸能から衣裳のアイデアを得ていたことや幕府による衣裳に対する取締り、見分が行われていたことが分かった。そのような状況下においても、役者は衣裳に趣向を凝らし、改良を重ねていた結果、一部の衣裳には定型化も生じていた。

第5章では、宝暦元(1751)年から享和3(1803)年までを「宝暦期を中心とした歌舞伎」と定義した上で、衣裳について論じた。

江戸時代の歌舞伎衣裳は、制作費の負担者の違いから手衣裳と蔵衣裳に分れていた。蔵衣裳については、衣裳に関する殆どの業務を担っていた衣裳方が管理を任されていたことが分かった。衣裳は、役者の評価の対象となっており、出世においても重要なものになっていた。そのため、役者は、役に合った衣裳、高い評価を得られる衣裳を着用するために知恵を絞っていた。また、武家と歌舞伎役者は、表向きは取り締まる側と取り締まられる者という関係性であったが、私的な場では人間関係があり、物品のやり取りを行うこともあったことが明らかになった。宝暦3(1753)年に初演された「京鹿子娘道成寺」を事例に、歌舞伎衣裳と能装束との関係性について検討すると、能から題材を取り入れた演目であっても、能と同じ扮装をする事例は一部にしか見られないことが分かった。これは、社会における芸能の位置付けが影響していると考えられる。

第6章では、文化元(1804)から慶応3(1867)年までを「化政期・幕末期を中心とした歌舞伎」と定義した上で衣裳について論じた。

三代目中村仲蔵による『手前味噌』からは、役者は、衣裳にこだわりを持ち、資金を投入し、呉服屋や衣裳屋などで衣裳を調達しており、時には古着の衣裳を着用することもあったことが明らかになった。また、衣裳に対する取締りは、天保期を中心に厳しい取締りがなされており、衣裳に関して記された帳面の提出も求められていた。役者絵に描かれた役者と女性の小袖を比較した結果、女形の衣裳を中心に一般女性の小袖様式が反映されていたことが明らかになった。「勸進帳」を事例に、能と歌舞伎の社会における芸能の位置付けと衣裳の関係性について検討した結果、江戸時代における芸能の位置付けは衣裳に影響していることが明らかになった。

第7章では、これまでの研究について要約した上で、以下4点について考察した。

第一に、各時代の様式について、衣裳の特徴をふまえた上で、草創期から順に、舞台衣裳

の黎明期、舞台衣裳としての役割を確立する時期、歌舞伎衣裳が独自性を形成する時期、歌舞伎衣裳が多様化していく時期と定義した。

第二に、歌舞伎役者、観客をはじめとした市井の人々、幕府・武家の視点から歌舞伎衣裳を捉えると、それぞれが衣裳に対し、一貫した考え方を持っていたことが明らかになった。また、衣裳には、役者の考えだけでなく、社会における人々の衣裳に対する考え方も影響していたことが分かった。

第三に、衣裳の調達については、費用の負担者の違いにより調達方法が異なっていたことが明らかになった。手衣裳の場合は、呉服屋や衣裳屋で新しい衣裳を購入する事例、古着の衣裳を使用することや日用品からの転用の事例があった。蔵衣裳は、役者、衣裳方、狂言作者などのやりとりの上で衣裳が用意されていた。

第四に、歌舞伎衣裳と他の芸能衣裳との関係性については、江戸時代の社会における芸能の位置づけが、衣裳においても大きく影響していることが明らかになった。

以上の成果は、江戸時代の歌舞伎衣裳について多角的な視点から明らかにしたものであり、今後の歌舞伎衣裳に関する研究の発展に寄与するものであると考える。